

国際性豊かな日本人の育成についての一考察

前在ベネズエラ大使館附属カラカス日本人学校 教諭
島根県松江市立古江小学校 教諭 多久和 朋 之

キーワード：国際理解教育、現地理解教育

1. はじめに

ベネズエラ・ボリバル共和国は、南米大陸の北部に位置し、人口は約3000万人、面積は日本の約2.4倍を有する。世界有数の埋蔵量を誇る石油資源と、陸海それぞれに魅力的な観光資源を持つが、政府の失政と原油価格の低下により、経済と治安の状況は悪化の一途を辿っている。それに伴い、日本からの家族連れの駐在員も減少しており、日本人学校の児童生徒数も近年は減少傾向にある。

いくら人数が少なくなろうと、このような厳しい環境の中で生活し、毎日の登校を楽しみにしている児童生徒のために教育活動の充実を図ることは、私たち派遣教員の責務である。そして、そのために私たちには、この海外での経験から資質能力及び指導力の向上を図ることが課せられており、本研修期間において得たことを今後の日本での職務に役立て、グローバルな人材を育てていくことがこれからの役割でもある。

ここでは、4年間の現地での生活における体験から感じたことと、日本人学校における特徴的な実践を列記した上で、国際性豊かな日本人の育成についての考察をまとめていく。

2. 海外における生活体験から

(1) ベネズエラでの生活

①日本の常識・非常識

現地での生活において、日本では常識と考えることが全く通用しないことや、日本では非常識と捉えられることが日常的に見受けられることもある。日本人からすると、どうしても不自由さや不満を感じてネガティブに捉えがちではあるが、このような違いを経験することも現地理解につながると考える。

慢性的な交通渋滞、車の間をすり抜けるように走るバイク、穴の空いた道路など、現地では自動車の運転にも非常に気を使う。夜間は赤信号で停まって待つ方が強盗被害に遭う危険が高まる場合もあるなど、交通法規を守ることが必ずしも安全につながるわけではないということも学んだ。また、デモやイベントなどによる道路封鎖などに備え、公私問わず常に複数のルートを想定して運転をする必要があった。

経済状況の悪化に伴い、砂糖・小麦粉・油・パスタ・水などの食料や、トイレットペーパー・シャンプー・オムツ・生理用品・医薬品などの生活必需品が店頭から姿を消すことが多くなった。現地の人々は、配給に近い形で販売される品物を手に入れるため、毎日数時間も行列に並んでいる。「見つけた時に買えるだけ買って置く」という考え方は、不測の事態に対する備蓄という観点からも重要であった。

外貨不足などの理由によるインフレ率の大幅な上昇のため、ほんの数ヶ月間に物の値段が何倍にもなることも珍しくない。翌日にはさらに価値が下がるかもしれない現地通貨を貯金するという考えは、現地の人々になく、生活にゆとりのある人は、現金よりも車や不動産などの物に変えて蓄財をする。給料の価値が月ごとに下がっていく中で、多くの人が苦しい生活を強いられている状況を目の当たりにした。

②差別・偏見

現地では、見知らぬ人から‘chino’（中国人）と声をかけられることがよくある。こちらが日本人だとわかった途端、手のひらを返したかのように友好的な態度になる場合も多く、‘chino’という言葉には、中国人を蔑視するニュアンスが含まれていることがわかる。また、「黒人」や「太った人」など、ベネズエラ人同士でも、相手の肌の色や体型の特徴をあだ名として呼んでいるのを聞くことも多い。

赴任前に南米のイメージとして思い浮かんだことは、ジャングル・サッカー・治安の悪さ・陽気・ずる賢い・時間にルーズなどであった。実際に現地暮らししてみると、全体的な傾向として当てはまることも多かったが、全てがイメージと同じということでは決してない。時間を必ず守る人や、物静かな性格の人もたくさんいる。先入観や一般的なイメージが偏見に結びつくことにならないよう、注意する必要がある。

(2) 海外から見る日本

①日本の文化

現地のショッピングモールでは、日本メーカーの時計・電化製品や、日本のゲームソフト・DVDなどがたくさん売られている。また、寿司も人気で、日本料理店や寿司チェーン店などでは、箸を器用に使って寿司を味わうベネズエラ人を多く見かける。外国で日本の文化を見かけると、とても嬉しい気分になるとともに、海外でも認識されている日本のよさがたくさんあることが分かる。

日本語や日本文化を学ぶベネズエラ人も非常に多い。日系人会館で行われている日本語教室には、毎週末、多くの学生や社会人が日本語の学習に通っている。毎年行われる日本語能力試験にも全国から300名近い受験者が集まり、日本語に対する関心の高さを知ることができる。その中には、アニメや漫画への興味から日本語の学習を始めた人も多く、テレビでも日本のアニメが毎週放送されている。日本語教室への指導に出かけた際、偶然取材に来ていた日本文化を学ぶ大学生からのインタビューを受けたことがある。伝統的な日本の文化である歌舞伎について、日本人の考えを聞きたいというものであったのだが、日本人でありながら歌舞伎を鑑賞したことのな私には質問に満足に答えられず、申し訳ない気持ちになった。また、世界的にも有名な日本の観光地で自分が行ったことのない場所や、自分が知らなかった日本のニュースが現地の人々の話題になることもあり、日本人として、日本のことをもっと深く知りたいという気持ちが高まった。

②豊かな国

日本が豊かな物とサービス精神にあふれた素晴らしい国であるということは、海外で暮らすと非常によく分かる。一方で、スーパーマーケットに行っても品物がない、欲しい物が次はいつ手に入るか分からない、といったことが日常である現地では、限られた物を皆で共有しようとする助け合いの姿勢や、修繕して物を長持ちさせようとする姿勢に感心させられることがある。日本とベネズエラを比較すると、幸福度や自殺件数の調査などでは、日本の方が悲観的な数値を示している。物があふれる日本とは違い、国民の多くが貧困や治安の悪さで苦しい生活を強いられている現地ではあるが、その中でも生活を楽しもうとする姿を見るにつけ、真の豊かさとは何かを考えさせられる。

(3) 異業種間交流と国際交流

長期滞在者と永住者を合わせて約400名の現地ゆえ、狭い日本人コミュニティ内の結び付きも必然的に強くなる。商社または企業の駐在員や大使館員などと、公私を問わず触れ合う機会も多かった。私たち教員、しかも地方在住者にとって、このような異業種の方々と日常的に交流できる機会は減多になく、社会を知る上で貴重な研修の場ともなった。また、日本から移住してきた方や、その子弟である日系人の方と接する機会も多々あった。海外で暮らす日本人が持つ祖国への郷愁や、現地での苦労など、様々な思いに触れることができた。

日本人・日系人だけでなく、主に趣味のサッカーを通じて、ベネズエラ人はもちろん、韓国・中国・マレーシア・ベトナム・ドイツなど、様々な国の駐在員とも交流を深めることができた。仕事でスペイン語を使用する必要はほとんどないが、日常生活のために週1回、家庭教師によるスペイン語のレッスンを受けていた。彼らとの交流は、語学習得へのモチベーションを高めることにもつながった。

3. カラカス日本人学校における取組

(1) 運動会〈1・2年目〉

日本人学校の運動会は、児童生徒・保護者だけでなく、在留邦人・日系人・日本語を学ぶ日本人等の約400名が参加し、毎年多くの人が楽しみにしている一大イベントである。挨拶・競技・役員の仕事など、児童生徒の出

番も多く、大勢の人の前で発表をしたり、現地に住む人々と関わったりできる貴重な機会でもある。2年目には、前年度の内容を踏襲しつつも、現地校児童生徒との交流種目やカラカス太鼓の演奏などの新しい取り組みを導入し、現地の子供たちとの交流や、日本文化の発表を行うことができた。

(2) アピラ登山〈1・4年目〉

カラカス居住区からほど近いアピラ山への登山は、日本人学校の伝統行事として例年実施している。校外での活動における児童生徒の安全確保は重要な課題であるため、大使館とも連携を図りながら事前に複数



運動会での太鼓演奏

ルートの下見を実施し、緊急時への想定も万全に整えておいた。1年目は、アルジェリアにおける邦人殺害の事件を受け、外務省から安全管理の徹底の通達が各国に出されたため、大使館の判断により中止となった。私が再度担当した4年目は、全ての児童が設定した目標地点まで到達した。頂上からはカリブ海の雄大な景色を眺めることができ、現地への愛着を深め、大きな達成感を味わうことのできる活動となった。

(3) 和太鼓指導〈2～4年目〉

日本人学校では、20年前に始まった伝統ある「カラカス太鼓」の演奏に、児童生徒ならびに教職員が一体となって取り組んでいる。主担当となってからの3年間は、楽譜の忠実な再現と、正しい演奏フォームの定着を重点とし、指導を行った。少人数ながらも3曲の演奏を完成させ、運動会、現地校との交流学习、学習発表会、日本文化週間、40周年記念式典などの行事では、大勢の人が集まる大舞台で堂々と演奏をすることができ、満足感を味わうことができた。また、日本でも和太鼓の演奏をしたことのない児童生徒がほとんどであり、自分たち自身が日本の文化を体験するとともに、海外の人に日本の文化を伝える活動として、大変大きな成果を得ることができた。

(4) 校外学習〈3年目〉

ベネズエラの特産品の1つとして、上質なカカオが世界各地で高い評価を受けている。3年目に担当した校外学習では、2つのチョコレート工場見学を実施した。一方は、チョコレートをチョコレート菓子に加工する工場、もう一方は、カカオからチョコレートを作る工場である。事前には現地採用教諭と下見に行き、バスのルート確認、現地の安全確認、昼食場所の選定等を行った。工場の都合で順序は逆になったが、カカオからチョコレート、チョコレートからチョコレート菓子への工程を見学することができ、充実した内容の現地理解学習となった。一緒に参加した保護者からも好評で、ベネズエラのよいところを親子で学び、共有する機会とすることができた。

(5) 宿泊学習〈3・4年目〉

毎年、全校児童生徒による宿泊学習を実施している。この行事に合わせ、社会科や総合的な学習の時間等と関連付けながら学級ごとにテーマを設定し、近隣への校外学習に出かける活動を設定した。消防署・警察署・市役所などの社会見学、アティージョ市内の町探検、動物園や植物園の見学など、各担任のアイデアを生かし、学年に応じた体験的な学習の場として有意義なものとなった。また、校外学習の後には、レストランで郷土料理を味わい、翌日の調理のための食材もスーパーマーケットや八百屋で購入するなど、現地の人々との交流ができる場を意図的に設定した。

予期せぬ事件や事故が発生した場合、スクールバスで居住区へ帰ることができないことも想定される。小学部1年生の児童から宿泊学習に参加するのは、このような緊急時への備え方を知り、安心させるためでもある。低学年児童が親を離れて宿泊することには心配もあったが、全ての児童がこの活動をむしろ楽しみにしており、杞憂に終わった。

(6) JICA 交流会〈3・4年目〉

これも毎年恒例の活動として、ベネズエラ各地で活躍するJICA（青年海外協力隊員）との交流会を実施している。隊員には、プレゼンテーションなどを活用して、それぞれの任地での活動の様子や、志願の動機などについて児童生徒に伝えてもらった。隊員のほとんどが、首都カラカスから離れた地方で活動しており、児童生徒が普段ほとんど行く機会のないベネズエラ各地の様子を知ることができた。それぞれの専門性を生かした活動の様子や、志願の動機を聞くことは、キャリア教育の側面からも意義のある活動であったと考えられる。また、調理やスポーツなどの活動を、隊員と一緒にやった。児童生徒も大喜びで活動に取り組み、隊員との交流も深まった。

(7) 教務主任（3・4年目）

3・4年目には、教務主任を務めた。日本人学校では、上記の取組以外にも、学習発表会や現地校との交流学习、スペイン語会話学習、全校学活などの特色ある活動を行っている。日本と同等またはそれ以上の時数を確保しつつ、特色を生かした教育活動ができるよう、教育課程の編成等を工夫した。

4. まとめ・考察

最後に、上記の生活体験と実践を踏まえ、今後私たちが果たすべき役割である国際性豊かな日本人の育成についての考察を記述する。

(1) 外国語の能力

日本語が他の国では通じないことが多いため、私たち日本人にとって、国際交流を図る上での大きな障壁となるのが言語である。語学ができないよりできた方がいいのは当然だが、実際には単語だけで理解してもらえの場合や、身振り手振りで伝わることも多い。文法を正しく覚えることももちろん大切ではあるが、積極的に意志を伝えようとする気持ちがより重要だと考える。小学校の外国語活動においても、他国の言語に慣れ親しみ、外国人とのコミュニケーションに抵抗を持たないようにすることをねらいとして推進していきたい。

(2) 国際感覚と人権感覚

豊かな国際性とは、適切に自己理解と他者理解をした上で、調和のとれた自他の尊重ができる能力であると考えられる。日本の国を知り、日本人であることに誇りを持つことと、相手の国を知り、日本との相違点やその国のよさを見つけることが同時にできるバランス感覚が必要である。

任期中に、歴史上類を見ない統治版図で1000年以上続いたローマ帝国の歴史について書かれた本を読んだ。偏見や差別意識に捉われて抑圧的な支配をするのではなく、他者との相違点を理解した上で、「寛容」な精神を持って同化していくバランス感覚に秀でたローマ人の生き方こそ、グローバルな社会を生きていくためのお手本となるものだと思うにはいられなかった。現代人でも到達できていないのではとも思える2000年以上昔の先人たちの思想に驚かされるとともに、教科を問わず、また日頃の生活指導においても、国際感覚と人権感覚を育んでいけるような取組を進めていきたいと感じた。

(3) saberとconocer

日本語の「知る」という単語は、スペイン語で‘saber’（サベール）と‘conocer’（コノセール）という2つの単語で表される。‘saber’は、知的活動の結果として知る、‘conocer’は、主に見聞によって知る、つまり体験または経験したことがあるという意味を持つ。日本には、「百聞は一見に如かず」という言葉もあるが、国際理解を深める上でも、体験的・経験的な知識の獲得がより重要であると考えられる。現地における4年間の研修で‘conocer’したことを還元し、子供たちがより主体的に、体験や経験を通じて学ぶことのできる機会、すなわち‘conocer’できる機会を提供していくことが、今後の私の使命であると強く感じている。